

Development of Confeccao (clothing) industry in Santa Cruz do Capibaribe, Pernambuco State, Northeast Brazil 1

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/436 |

ブラジル北東部ペルナンブコ州 サンタクルスドカピバリベ市における縫製業の地域的展開(1) ——産地の形成過程と人口動態——

丸山 浩明・須山 聡*¹・矢ヶ崎典隆*²・斎藤 功*³

Development of “Confecção (clothing)” industry in Santa Cruz do Capibaribe, Pernambuco State, Northeast Brazil (1) —Formation Process of Confecção Production Center and Dynamics of Population—

Hiroaki MARUYAMA, Satoshi SUYAMA*¹, Noritaka YAGASAKI*² and Isao SAITO*³

はじめに

16世紀に始まるポルトガル人植民後のブラジル経済は、ブラジル木 (Pau Brasil) の採集から、砂糖、タバコ、カカオ、綿花、金、コーヒー、生ゴムへと移行する、一次産品のヨーロッパ輸出を目的とするモノカルチャー的な経済の発展 (Boom, ブーム) と衰退 (Bust, バスト) の繰り返しにより進展してきた。このうち、18世紀末までのブラジル経済を支えたブラジル木、砂糖、タバコ、カカオや、18世紀以降に急成長をみせた綿花などの一次産品は、いずれもノルデステ (Nordeste, ブラジル北東部) を舞台に “ブーム&バスト” を繰り返した経済サイクルである。

ノルデステの中でも、とりわけゾナダマタ (Zona da mata) と呼ばれる狭長な大西洋沿岸地域は、ブラジル木やサトウキビ、タバコ、カカオの主要な生産地としてポルトガル植民地時代のブラジル経済を担ってきた。とくに、植民当初から発展をみせた砂糖の経済サイクルは、サトウキビ栽培 (農業) と製糖業 (工業) の一体的な発展によりもたらされたもので、約3世紀にわたるサイクルの長さやその経済的な重要性はいうまでもなく、ブラジルの社会・文化に与えた影響力の大きさなどからも他の一次産品の追従を許さぬほどブラジル経済に果たした役割は絶大であった。

一方、同じノルデステに位置しながら、牧畜業の導入によりゾナダマタへの食糧 (肉やチーズなどの乳製品)、皮革製品、役畜 (サトウキビを搾る圧搾機や荷車の動力源) の供給基地として開拓された内陸部のセルトン (Sertão) やアグレステ (Agreste) では、長くサトウキビのような経済性の高い商品作物を見い出せないまま、ファゼンデイロ (Fazendeiro, 大農場主) を頂点とする家父長制社会のもとで、粗放的な牧畜経営や自給的農作物の多種複合経営が営まれてきた。

そんな中で、ノルデステの内陸部で顕著な発展をみせた数少ない商品作物の一つが綿花であった。18世紀後半に北アメリカからマラニオン州に導入された草本性綿花は、ジョゼ1世の宰相として活躍したポンバル侯 (Pombal Marquês de) の尽力のもと、アフリカから輸入された多数の黒人奴隷の労働力により栽培され発展した。マラニオン州に導入された綿作 (Cotonicultura) は、その後18世紀後半から19世紀にかけてノルデステ全域に拡大して発展を遂げたが、とくにマラニオン州のイタペクルー川上流域、セアラ州のジャグアリベ川上流域、リオグランデドノルテ州のセリド (Seridó) 河谷、そしてペルナンブコ州のとくにブレジョス (Brejos, 地形性降雨の影響で周囲より降水量が多い湿潤島) を中心とするアグレステ一帯がその主産地であった。そして、綿作の普及によ

り熱帯乾燥・半乾燥のセルトンやアグステでも人口が増加して村落や町が拡大・発展した。

しかし、ノルデステで大量に生産された綿花は、宗主国であるポルトガルの政策により原料として海外へ輸出され、ブラジル国内で加工されるようになるのは19世紀初めにポルトガル王朝がブラジルに移転してから後のことであった¹⁾。加えて、綿はサトウキビのようにすぐに加工する必要がないため、農業(綿作)地域と工業(綿紡績)地域はそれぞれ内陸農村と沿岸都市に遠く分離したまま存在することが可能で、内陸農村の工業化は進まなかった。内陸農村の綿作農場は、ゾナダマタの製糖農園のように農産加工業も内包する大農場を形成する必要がなく、粗放的な牧畜業や自給的な作物栽培に小規模な綿作を加えた経営形態を長く維持することになった²⁾。

干ばつが頻発する厳しい自然環境条件や、さまざまな経済活動を支える道路などのインフラストラクチャーの未発達などから、ノルデステの内陸農村は未だにほとんどの地域が農牧業に基礎を置く伝統的な生業形態を維持しており³⁾、ラッパドゥーラ(Rapadura, 粗糖)やハンモック、刺繍、レンガ、木炭、石灰などが農家副業として家内工業で細々と生産されている程度である⁴⁾。

ところが、このような伝統的生業形態が支配的であるノルデステの広大な内陸農村地帯の中に、とりわけ1960年代以降の縫製業の発展により、顕著な経済成長と人口増加による都市化を実現した町、ペルナンブコ州サンタクルスドカピバリベ市(Município Santa Cruz do Capibaribe, 以下サンタクルスと略記)がある。そこは、あたかもかつてブラジル経済を支えたゴールドラッシュやゴムブームの際に出現したブームタウン(Boom town)のような様相を呈しており、ノルデステはもとより遠くアマゾンアやサンパウロ州などからも多数の顧客を引き寄せている。

本地域の縫製業関連業者は、製造・販売業者

ともに統計的に捕捉できないインフォーマルセクターが圧倒的多数を占めており、その実数を把握することはほぼ不可能である。セブラエSEBRAE(Serviço Brasileiro de Apoio às Pequenas Empresas, ブラジル小企業支援サービス)のデータでは、1992年のサンタクルスにおける縫製業関連事業所総数は1,500である。このうち全体の93.8%に当たる1,407事業所が未登録事業所で、登録事業所は個人登録の69(4.6%)と法人登録の23(1.53%)を合わせても92(6.13%)に過ぎない。これら大多数を占める未登録事業所は、いずれも家族労働力に依存した零細な製造・販売業者であり、全体の69%は生産から販売・管理に至るまで全く雇用労働力を利用していない。そして、全体の86.47%に当たる1,297事業所の月収が、最低賃金の3倍未満である⁵⁾。

いくつかの文献が示すところでは、サンタクルス全世帯の85%にあたる約7,400世帯が縫製業関連の産業に従事しており、そのうちの94%がインフォーマルセクターに属しているという⁶⁾。また、1994年1月現在のサンタクルスの推定人口は40,971人であるが、その約75%に相当する3万人が衣料品の製造業者(Sulunqueiros, Fabricantes)である。さらに、毎週開催される衣料品専門の定期市で商品を販売する露店商(Feirantes)の数は1万人にも達するという。縫製業に関わる銀行の資金流動量は月間5千万ドルにも達し、受益者数は30万人にもものぼるといわれている⁷⁾。

縫製業関連事業所の業種構成は、おおまかに衣料品の製造業者とアタッカディスタ(Atacadista)と呼ばれる原材料-資材販売業者に大別される。前者は製造専業者と製造販売業者で、後者は原反、ファスナー、ボタンなどの付属品やミシンなどの縫製機械を販売する業者である。アスカッピ ASCAP(Associação dos Confeccionistas de Santa Cruz do Capibaribe, サンタクルスドカピバリベ縫製業者協会)の名簿によると、1997年現在の製造販売業者は

49, アタッカディスタは31 (このうち21は原反販売商で, 付属品と縫製機械販売商がそれぞれ5) となっている⁹⁾。

大土地所有制に起因する家父長制社会の中で, 伝統的な生業形態からの脱却を今なお果たせず, 若年生産労働人口の流出に苦慮するノルデステの多くの内陸農村にとって, 同様の環境条件下から短期間に縫製業の導入により工業化・都市化を実現したサンタクルスに対する関心は極めて高い。ノルデステの長い内陸部開発史の中でも希有な事例といえる, サンタクルスにおける縫製業の発展に関しては, 研究者はもとより⁹⁾, ノルデステの貧困や失業などの経済・社会問題に苦慮する行政担当者たちからも高い関心が寄せられている。

サンタクルスの縫製業は, これまで農村人口の主要な流出先となってきた沿岸部の大都市ではなく, 地域が内包する多量な余剰労働力を広大な内陸農村地帯内において有効に活用し, 農村経済を発展・活性化させる方法と可能性を示唆するものである。同時に, 内陸農村の持続的な発展を実現するうえで解決せねばならない, ささまざまな課題を浮き彫りにする極めて優れた事例と考えられる。

そこで, 本研究は伝統的な牧畜経営と自給的な小規模農業経営が卓越するノルデステの内陸農村において, 縫製業の導入により比較的短期間に顕著な経済発展と都市化を実現したサンタクルスを事例に, 縫製業の産地形成プロセスや衣服の生産・流通機構, そして産地が直面するさまざまな問題点を明らかにすることを目的とする。

なお, 予備調査を除く現地での本調査は, 1997年8月4日(月)～8月8日(金)にかけて実施した。

I サンタクルスの開発と自然環境条件

(1) 開発の歴史

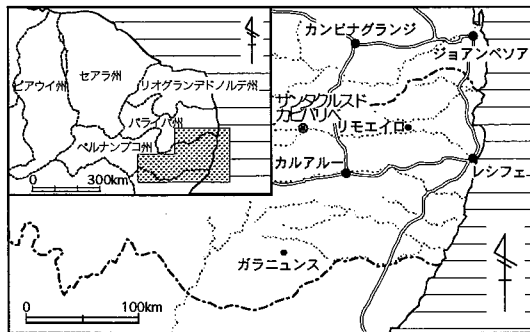
ヨーロッパから本地域にやって来た最初の開

拓者は, ポルトガル人のアントニオ・ブルゴス (Antônio Burgos) であった。彼はレシフェ市に住んでいたが, 重い病気を患い医者からの勧めで健康に望ましい療養地を求めてカピバリベ (Capibaribe) 川を遡った。そして, 1750年頃この地に辿り着いたといわれる。彼がここに到着する以前から, 既に小さな村落の形成はあったようである。彼は1500年に初めてブラジルの地を踏んだポルトガル人貴族たちが最初に行ったように, 小教会 (Capela) を建立してその前に木材で大きな十字架 (Santa-cruz) を建てた。サンタクルスドカピバリベ, すなわちカピバリベの十字架を意味する現在の地名は, カピバリベ川を遡上して発見した新天地に十字架を建てて感謝した彼の行為に由来するものである。小教会は1918年に母教会 (Matriz) へと昇格し, 1922年にはジョゼ・アポリナリオ・マルチンス (José Apolinário Martins) 神父が初代小教区主任司祭に任命された¹⁰⁾。

ここは当初“サンタ・クルス”とだけ呼ばれる小さな村落 (Povoado) に過ぎず, 1892年4月18日の郡令2号により初めて町 (Vila) への昇格を果たしたが, 依然としてその東に位置するタクアリチングドノルテ (Taquaritinga do Norte) 市の第2地区 (Distrito) にすぎなかった。本地域がタクアリチングドノルテ市の一部を統合して自治権をもつ市 (Município) に昇格するのははるか後のことで, 1953年12月29日の州令1,818号の発令に伴い翌年の5月9日に施行設置された。現在のサンタクルスは, 中心地 (Sede) とパラ (Pará) 地区, ポッソフンド (Poço Fundo) 地区, そしてオスカルゾン村落 (Povoado de Oscarzão) から構成されている¹¹⁾。

(2) 自然環境条件

サンタクルスはペルナンブコ州 (PE) の州都レシフェ市の西方192kmに位置し, 北部をパライバ州 (PA) のカバセイラスとバーハドサンミグエル, 西部をサンジョアンドカリリ (PA) とジャ



第1図 研究対象地域

タウバ(PE), 南部をブレジョダマドレデアウス(PE), 東部をタクアリチンガドノルテとトリタマ(PE)の各市に囲まれている(第1・2図)。サンタクルスへは東と西の2方向から接近するルートがあるが, 人や物資の流動はそのほとんどが舗装された国道104号線を利用する東からのものである。西のジャタウバからサンタクルスに通じる州道160号線(PE-160)は曲がりくねった未舗装の悪路で, 大型車両の通過は困難である。

サンタクルスはペルナンブコ州の近隣16市とともに等質マイクロリジョンの一つであるヴァレドイポジュカ(Vale do Ipojuca)地域を形成しており, 全体としてはアグレステに属するが, 実際にはその地域内に著しい自然環境条件の差異が発現しており, よりミクロな視点と地域単位での研究が必要とされる。

すなわち, サンタクルスはその北方に広がるノルデステで最も乾燥が厳しいマイクロリジョンの一つであるカリリスヴェーリョス(Cariris Velhos)に隣接している。一方, サンタクルスの南と東には, それぞれブレジョダマドレデアウスとタクアリチンガドノルテが立地するが, いずれもペルナンブコ州を代表するブレジョスである。つまり, サンタクルスはこれらブレジョス地域とともにアグレステに属しながらも, 実質的にはカリリヴェーリョスへの移行帯として乾燥の厳しいセルトンのな特徴を備えている。

セルトンのな環境は, 何よりも本地域の植生

に顕著に示されており, 熱帯半乾燥気候下にあることを象徴するカーチンガ植生(有棘灌木林, *Caatinga Hipoxerófila*)が広く展開している。ボルボレマ高地の北縁部に位置するサンタクルスの標高は435mで, 面積は430km²である。年平均気温は20℃, 1962年~1981年の年平均降水量は534mmで, 雨季は平年で2月~6月の僅か5カ月間である。市内を流れるカピバリベ川は間欠河川で, 雨季の僅かな期間しか水が流れない。

II 縫製業産地の形成過程と人口動態

1. 縫製業産地の形成過程

(1) スランカの導入と発展

(1940年代終わり~1950年代)

ブラジル政府が認定した干ばつ多角形地帯(Polígono das Secas)の内部に位置するサンタクルスでは, 熱帯半乾燥の広大な内陸農村に典型的な粗放的牧畜業と小規模な綿作を基礎とする伝統的な生業形態が, 1950年代まで卓越していた。町の中心部には家内制手工業による零細な履き物製造業もみられたが, それも原材料不足などから1950年代までには急速に姿を消した。

こうしたなかで, 1940年代の終わりから1950年代の初め頃に縫製業がサンタクルスに導入され, 新たな経済活動の萌芽となった。当初, 縫製業は履き物製造業による家庭収入を補完する程度の仕事として導入された。履き物生産が男性の仕事であったのに対し, 縫製業は女性の仕事であったため, 両者が労働面で競合することはなかった。また, この時期の縫製業はまだ家内制手工業の段階にあり, 女性は家で家事や育児などの仕事の合間をぬって仕事に従事できる利点があった。

一般にサンタクルスの縫製業の基礎を築いたのは, マノエル・カボクロ(Manoel Caboclo), ペドロ・ディニズ(Pedro Diniz), デデ・モライス(Dedé Morais)という3人の地方商人で

あったといわれている¹²⁾。すなわち、彼らは1950年代の終わりに州都のレシフェに出掛けて鶏やチーズ、木炭などを販売していたが、その返り荷として都会の繊維工場で廃棄された端切れ(retalhos de tecido)を無償で譲り受け¹³⁾、サンタクルスに持ち返ってごく安価(時に無料)で住民たちに販売した。端切れは女性たちの手作業により繋ぎ合わされ、品質は悪いながらもベッドカバーや敷物、そして普段着や野良着などの衣服に縫製された¹⁴⁾。

これらの商品は、製造業者が直接定期市に持ち込んで物々交換したり、あるいはレシフェの商人に販売されて周辺地域に広がっていった。この時期にはまだ製造業者が同時に販売業者でもあり、両者の間に仲買商人(Intermediário)などが入り込むことがなかったため、縫製業はかなり自立的な経済活動であった。当時、サンタクルスでは鳥籠販売人(Gaioleiros)と呼ばれる人々がノルデステに生息するさまざまな鳥を定期市に持ち込み、それを販売したり物々交換して本地域の縫製商品を手に入れ、それを地元の小さな町に持ち帰って販売したという¹⁵⁾。

縫製業の発展に伴う生産量の増大は、原材料の端切れをレシフェの繊維工場だけに求めることを不可能にした。そして、サンタクルスの原材料供給業者の中には、はるばる国内最大の繊維工業地帯であるサンパウロまで原料調達に出掛ける者が現れた。そこでは格段に多量の端切れを無料で入手することが可能であった。原材料供給業者の増加による端切れの安定確保により、製造業者はさらに増加し生産量も増大した。生産の拡大に伴う労働力不足は、成年女性に加えて子供(とくに女の子)たちの労働への参画を促した。文化的なタブーから男性が縫製の作業に直接参画することは極めてまれであったが、彼らは定期市での商品の販売などに従事するようになった。こうして、大都市の繊維工場で廃棄された端切れを原材料にサンタクルスで縫製される低品質な商品の存在は、ノルデステはもとよりブラジル中に知られる所となった。

このような縫製業発展の背景には、本地域で生産された商品に付けられた“スランカ(Sulanca)”という特殊な名称の普及があった。スランカの語源に関しては複数の解釈があるが、その一つは原材料の端切れのおもな供給地であるブラジル南部“sul”に起源をもつニット生地“helanca”という2語が言語上乱れて合体した造語とみる説である。もう一つは、商品を定期市に持ち込んだ商人と政府の税務官との間で交わされた会話に由来するもので、税務官が商人に持参した商品の証拠書類の提示を求めた際、商人が“単なるスランカですよ”と卑下して答えたことに由来するというものである。スランカとは低品質の取るに足らない商品を意味する俗称である。税務官はこの商人の申し出通り、持参した商品が証拠書類の提示が義務づけられていないスランカであることを認めたという。これがすぐに本地域の商品販売者たちの周知の事実となり、誰もが商品をスランカという名称で呼ぶようになった。つまり、スランカとは納税者としての門戸を開かないという意味合いを含む名称だったのである¹⁶⁾。

(2) 機械化の進展とスランカ定期市の開催(1960年代~1970年代)

1960年代はミシンの導入とその普及により、スランカの生産性が大きく向上した時代である。最初に導入されたのは極めて単純な手動ミシンであったが、その後足踏み式ミシンも普及した。1960年代の末には、サンパウロから日本製の低速回転ミシンや工業用ミシンも取り入れられるようになり、さらに1970年代の前半には足踏み式ミシンから電気を動力とする家庭用・工業用ミシンが導入され、著しい技術革新が実現した¹⁷⁾。近代的な生産技術の導入により、手縫いの頃とは比較にならないほど生産量は増加し、加えて品質も向上して均質化をみせた。原材料の生地も、従前の細かな端切れからより大型の端切れや一枚の原反(Tecido)が徐々に利用されるようになり、商品も市場での需要が大きい

衣服が中心となった。

急速な機械化やより高品質の原材料購入の背景には、1973年のブラジル銀行サンタクルス支店の開設があった。ブラジル銀行は零細な製造業者を支援するために、物的担保となる個人資産の厳しい算定を行わない信用貸しや、資金の返済を容易にする分割払いを導入して、マシンを購入するための融資を積極的に行ったのである¹⁹⁾。これは当時の縫製業の発展に対する銀行側の厚い信頼を示すものといえる。ブラジル銀行に続き、サンタクルスには連邦経済金庫（Caixa Economica Federal）やブラデスコ、イタウ、バンデピなどの諸銀行が次々と支店を開設し、積極的な資金融資に乗り出した。

1960年代に始まり1970年代に急速に進展した機械化と商品の多様化、品質の向上は、婦女子の未熟練労働力に依存してきた従前の零細な家内制手工業から、より近代的な縫製工業への移行を促した。完成品になるまでのさまざまな作業工程は、機械化や専門化を促し分業体制を確立させた。すなわち、機械による生地裁断や縫い合わせ、付属品の取り付け、製品の仕上げなどの諸工程を、契約に基づいて他の製造業者に専門的に依頼するもので、依頼者は雇用者に原材料や付属品などを渡し、商品のタイプや量、納期、工賃などについて契約を結び仕事を発注するようになった。こうした分業体制の進展により、縫製業の諸作業はサンタクルスを越えてより賃金の安い周辺の農村や町へと拡散していった。

生産の拡大と商品の質的向上は、その販売・流通機構にも大きな変革をもたらした。まず、1960年代末から1970年代始めにかけてスランカの露店が定期市に登場した。これは、サンタクルスのとある製造業者が自分の作ったスランカを商人や顧客たちに直接販売しようと、定期市の日に家の前大通りに陳列したのがその嚆矢で、それがたちまち他の製造業者たちにも広まり、またたく間にジョアンフランシスコアラゴン通りとシケイラカンポス通りにはスランカの

露店が立ち並ぶようになった。スランカの露店数は1975年には約100店に達したという¹⁹⁾。

製造業者による露店での販売行為は、当然地元商人の活動を妨害するものであったが、縫製業の発展と販売の拡大による税収の増大を期待する市議会の強い支持もあり、スランカ専用の露店は存続することになる。市議会はさらに食料品を中心とする月曜の定期市のほかに、毎週木曜日にスランカ専用の定期市を開催し、周辺町村から顧客を集めて商品を直接販売しようと考えた。そして、1979年からスランカ市（Feira da Sulanca）と呼ばれる衣服専用の定期市が水曜日の夜から木曜日にかけて開催されるようになり、サンタクルスには大量の人と車が流入するようになった。この年にはサンタクルスと他の都市を結ぶ国道104号線（俗にスランカ道と呼ばれる）の舗装工事も実現し、外部商人らの流入が活発化してスランカの交易はさらに強化された。

また、製造業者の中には地元の定期市で販売するだけでなく、家族の一員を他の町へ行商させて商品を売りさばく者も現れた。こうした行商人の多くは、品質の悪いスランカの需要が大きいゾナダマタのサトウキビ地帯を目指した。さらに、サンタクルスのスランカ市に顧客としてトラックで買い付けに訪れ、そこで購入したさまざまな商品を大量に持ち帰って自分の店や市場開拓した町々で販売する商人たちも現れた。そして、このような仲買商人の増加に伴い、スランカの販路は地元ペルナンブコ州からバイア州の内陸部（とくにスランカの需要が大きいサンフランシスコ川流域のシザル麻やヒマ栽培地域）へ、そしてさらにより大きな購買力を備えたマラニョン州へと拡大していった。

（3）生産の拡大とコンフェクソンへの移行 （1980年代）

1980年代はスランカの品質向上がとくに顕著であった。すなわち、製造業者は市場で消費者受けする洗練されたモデルのコピーや開発に力

を注ぎ、商品に自らの商標まで付けて販売するようになった。この時期には原材料も端切れから一枚の原反へと移行しており²⁰⁾、比較的品質の高い洗練されたモデルの商品は、既に低質な商品を意味するスランカという名称にはそぐわなくなった。そして、この頃よりスランカに代わりコンフェクソン (Confecção) という名称が一般的に使われるようになる。

商品の多様化と質的向上は、作業工程の細分化と専門化をさらに促進した。機械も生地 of 裁断機から、作業内容により機能特性が異なるさまざまな電動ミシン、仕上げ機に至るまでさまざまなものが国の内外から導入された。このような変化は、家内制手工業に立脚する零細な製造業者の経営を徐々に困難なものとする一方で、優れた機械装備を活用して細分化・専門化した作業工程を一貫処理し、さらに自社商品の店頭販売までも行う、近代的な大規模製造販売業者の台頭を促した。このような生産流通機構の近代化を担ったのは、大多数を占める零細な製造業者ではなく、資本力を備えた商人たちの縫製業への進出であった。とくに、アタッカディスタと呼ばれる原材料供給業者は、コンフェクソン生産量の急増にともない需要が増大した原材料や機械販売で経済的優位に立ち、地方政治の領域にまで進出して行政の中枢部を占めるようになった。

ペルナンブコ州の工業年鑑 (Cadastro Industrial, Pernambuco)²¹⁾によると、縫製業関連事業所の記載が初めて現れるのは1979年で、その数は僅か5事業所である。それが1985年には33、1988年には64事業所へと急増をみせている。したがって、同資料からみる限り、スランカ産業は1980年代を通じて飛躍的に成長したと考えられる。無論、ここでこの資料に記載される事業所が比較的大規模な事業所に限られるという点を考慮すると、1980年代に大規模な製造販売業者が飛躍的に増加して本地域の縫製業を担うようになったことを示唆している。ちなみに、セブラエのデータでは1,500事業所の52.67%に当

たる790事業所が1981年～1990年に開設されており、同期の飛躍的な成長を裏付けている²²⁾。

一方、生産から販売までを一貫して行う大規模な製造販売業者が台頭する中で、数のうえでは圧倒的多数を占める零細な製造業者を支援・救済する活動も実施された。なかでも、1980年代のウノ UNO (União Nordestina de Assistência a Pequenas Organizações, 小規模経営体を支援するノルデステ連合) の活動は、政府機関や国際的な銀行の資金を活用して小規模生産者に対する技術的・経済的支援を行った点で傑出している。また、ウノは生地 of 裁断や型作りから、商品の販売や市場の開拓、協同組合の結成、生産流通機構における商人の排除による原材料の安価な購入と商品の効率的販売など、生産一流通の全般に関わる理論的な指導も実施した。

このように、1980年代にはサンタクルスの縫製業が飛躍的な発展を遂げ、生産量の増大や品質の向上、大規模な製造販売業者の増加が認められた。この事実を、1992年の縫製業関連事業所の内、その52.7%に該当する790事業所が1980年代に開設されたことを示すセブラエのデータからも明らかである²³⁾。

(4) 政府の経済政策に翻弄される縫製業産地 (おもに1990年代)

1990年代は、サンタクルスの縫製業がかつて経験したことのない大きな危機 (Crise) に見舞われた時期である²⁴⁾。しかし、その兆候は縫製業が飛躍的な発展をみせた1980年代の後半から既に始まっていた。すなわち、ブラジル政府は1986年に高いインフレを抑制するために物価の全面凍結や公共料金的大幅値上げなどを内容とするクルザードプラン (Plano Cruzado) を実施に移した。その結果、製造業者たちは銀行などから資金融資を受けることが困難となり生産が行き詰まった。加えて、商品価格も抑えられ販売量も大きく落ち込んでしまった。

資本力をもつ大規模製造販売業者に比べ、圧

倒的多数を占める零細な製造業者が受けた経済的打撃は著しく、倒産や廃業する者も増加した。大規模な製造業者が急増する中で、零細な製造業者にとって1980年代後半は既に衰退期に属していたと位置づけられる²⁵⁾。零細な製造業者を支援してきたウノ自体も、1980年代後半には資金不足に直面してその機能を十分に果たせなくなってしまう。

さらに、コロール大統領が1990年に就任すると、インフレを抑制するための個人の金融資産の凍結などを骨子とするコロールプラン（Plano Collor）が突如発表され、経営に必要な資金も一定額以上自己口座から引き出せなくなった。さらに、1994年にはカルドーズ大統領のもとで新通貨レアルが導入され、再びインフレ対策のための消費の抑制や流通通貨の撤収、対ドルレートの厳格な管理などを内容とするレアルプラン（Plano Real）が実施に移された。このような連邦政府による度重なる突然の経済政策の変更により、商品の生産・販売量は激減し、とくに零細な製造業者は次々と倒産した。また、手形の不渡りや支払いの遅延といった問題が顕在化し、サンタクルスの縫製業は大きく混乱した。

国の経済政策に翻弄されて危機的状況に立ち入ったサンタクルスの縫製業界は、政府に対してノルデステ銀行を通じての労働者支援資金（FAT, Fundo de Assistência ao Trabalhador）のような緊急予算の早期出動を要請した。また、セブラエやASCAPは、零細な製造業者を経営危機から救済するための資本投資を活発化させ、市場で他産地の衣服とも競合できるだけの品質の向上に努めた。ASCAPは1992年7月に第1回サンタクルスファッションショー&即売市（I Feira da Moda e Pronta Entrega de Santa Cruz do Capibaribe）を開催したが、その後レシフェ、フォルタレーザ、マセイオ、ナタール、カルアルー、ジョアンペソアでも同様の催し物を開いている²⁶⁾。また、セマーナサンタにはサンタクルスで“衣服の週間（Semana da

Confecção）”も開催されるようになり、危機を脱する一つの手だてとして商品の宣伝活動に力が注がれるようになった。

一方、経済的危機に直面して経営が行き詰まった零細な製造業者に対する銀行の対応は冷ややかであった。この経営危機を乗り切るため、特別な資金援助要請が銀行に対して行われたが、かつてのように信用貸しや長期分割払いによる積極的な資金融資は行われず、融資に際してはとくに物的担保の厳しい査定と保証人の資産が重要視されるようになった。これは零細な製造業者が銀行から一般融資を受けることがほとんど不可能なことを意味しており、実際、銀行は縫製業関連の小規模事業所に対する一般の融資事業から事実上撤退してきたといえる²⁷⁾。

ただし、その効果は極めて疑わしいものの、ブラジル銀行はセブラエや連邦政府の協力の下に新たな特別融資事業を軌道に乗せようと動き始めている。その一つは、中・小・零細な事業所の設備投資に関わる資金融資事業で、ミペン投資（MIPEM Investimento, MIPEMのMIはMicro=零細、PEはPequena=小、MはMédia=中を意味する）と呼ばれている。1993年に始まるこの事業は、資金融資に際して必要な保証人の代わりに政府機関のセブラエが引き受けることで初めて実現した。融資を受けるには事業計画書の提出が必要で、融資額はセブラエの積立基金の2倍額を上限に設定されている。これは、換言すればセブラエの基金を担保にブラジル銀行が資金を融資することを意味している²⁸⁾。

もう一つは、ミペンファット（MIPEM FAT, FATはFundo de Amparo do Trabalhadorの頭文字をとったもので、労働者支援基金を意味する）と呼ばれるもので、やはり中・小・零細な事業所の設備投資に関わる資金融資事業である。この事業はまだ計画段階であるが、1997年末までには実施に移す予定だという。ミペン投資がブラジル銀行の資金融資であったのに対し、ミペンファットは連邦政府、すなわち国庫

第1表 サンタクルスの人口動態 (1940年~1991年)

| 属性 | 年次 | | | | | | 人口増加率(%) | | | | | |
|-----------|------------|------------|------------|------------|-------------|-------------|----------|-------|-------|-------|-------|---------|
| | 1940年 | 1950年 | 1960年 | 1970年 | 1980年 | 1991年 | 40~50 | 50~60 | 60~70 | 70~80 | 80~91 | 40~91 |
| ブラジル合計 | 41,944,397 | 51,944,397 | 70,070,457 | 93,139,037 | 119,002,706 | 146,825,475 | 23.8 | 34.9 | 32.9 | 27.8 | 23.4 | 250.0 |
| ペルナンブコ州合計 | 2,688,240 | 3,395,185 | 4,095,379 | 5,160,640 | 6,141,993 | 7,127,855 | 26.3 | 20.6 | 26.0 | 19.0 | 16.1 | 165.1 |
| レシフェ郡合計 | 348,424 | 524,682 | 788,336 | 1,060,701 | 1,203,899 | 1,298,229 | 50.6 | 50.3 | 34.5 | 13.5 | 7.8 | 272.6 |
| カピバリベ市合計 | 2,379 | 3,250 | 7,591 | 11,685 | 21,112 | 38,303 | 36.6 | 133.6 | 53.9 | 80.7 | 81.4 | 1,510.0 |
| 農村人口 | 1,138 | 1,131 | 2,429 | 2,868 | 2,677 | 3,275 | -0.6 | 114.8 | 18.1 | -6.7 | 22.3 | 187.8 |
| 都市人口 | 1,241 | 2,119 | 5,162 | 8,817 | 18,435 | 35,028 | 70.7 | 143.6 | 70.8 | 109.1 | 90.0 | 2,722.6 |
| 都市人口比 | 1.1 | 1.9 | 2.1 | 3.1 | 6.9 | 10.7 | - | - | - | - | - | - |
| 男性人口 | | | 3,734 | 5,609 | 10,118 | 18,244 | | | 50.2 | 80.4 | 80.3 | - |
| 女性人口 | | | 3,857 | 6,076 | 10,994 | 20,059 | | | 57.5 | 80.9 | 82.5 | - |
| 女性人口比 | | | 1.0 | 1.1 | 1.1 | 1.1 | | | - | - | - | - |

注) 都市人口比 = (都市人口 / 農村人口) × 100、女性人口比 = (女性人口 / 男性人口) × 100 (Censo Demografico, Brasilより作成)

資金に依存する融資事業である。本事業の融資限度額は、1企業当たり R\$50,000、1個人当たり R\$5,000である²⁹⁾。

このように、1980年代後半から1990年代はブラジル経済全体の混乱の中でサンタクルスの縫製業も大きな痛手を被った。その影響はとりわけ零細な製造業者の間で深刻であったが、他方で豊富な経営資金と機械化を背景に大きく生産・販売量を伸ばす大規模製造販売業者や商人も現れ、サンタクルスの縫製業は経営格差のさらなる拡大による2極分化が進展した。そして、サンタクルスは、その内部にさまざまな問題を内包しながらも、産地全体としてはノルデステ最大の縫製業拠点 (Maior Pólo de confecções do Nordeste)にまで成長し、その商品はブラジル中に流通するようになった。

2. 人口動態にみるサンタクルスの都市化

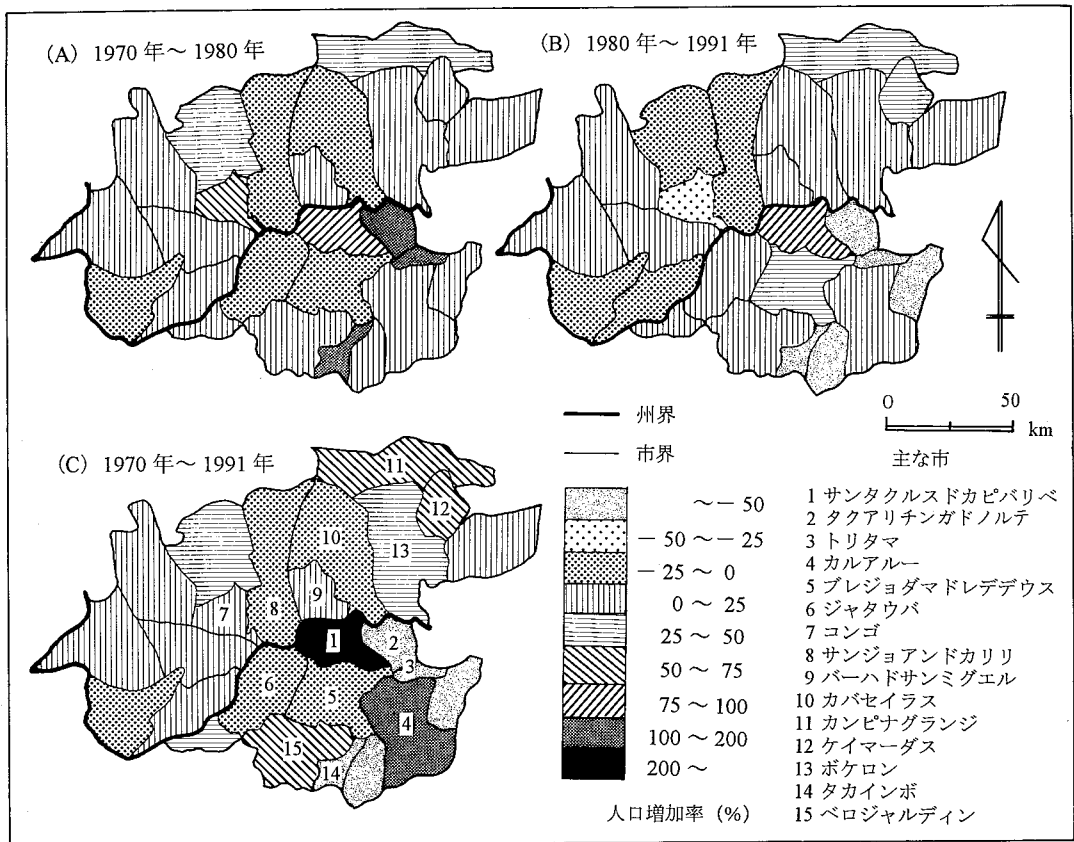
サンタクルスで1950年代以降に進展した縫製業の急激な発展ぶりは、本地域の特筆すべき人口動態にも端的に反映されている(第1表)。そして、その特徴はサンタクルス周辺自治体の人口動態と比較検討する時、より鮮明で顕著なものとなる(第2図)。

伝統的な生業形態が支配的であったスランカ導入以前の1940年には、サンタクルスの総人口は僅か2,379人であった。都市人口比(都市人口/農村人口)も1.1で、人口の顕著な都市部へ

の集積は認められない。しかし、スランカ生産の萌芽期と目される1950年には、人口は3,250人に増加しており、1940年~1950年期の人口増加率は36.6%に達した。これは同期の州都レシフェ(50.6%)の値には及ばぬものの、ブラジル(23.8%)やペルナンブコ州(26.3%)よりも高い増加率であった(第1表)。

また、1950年には都市人口比が1.9まで上昇しており、都市人口が農村人口の約2倍に達している。このことは、1940年~1950年期の人口増加率が農村人口では-0.6%と僅かながらも減少をみせている一方で、都市人口は70.7%という高い増加率を示していることにも伺える。これは当時既に農村部からスランカ生産の主要な現場である都市部へと労働力の流出が始まっており、人口移動に起因する都市人口の増加が進展し始めたことを示唆している(第1表)。

サンタクルスの人口は1960年にはさらに7,591人へと急増し、1950年~1960年期の人口増加率も133.6%に達した。これは同期のブラジル(34.9%)やペルナンブコ州(20.6%)、さらには大都市レシフェ(50.3%)の人口増加率をはるかに上回っており、この時期にサンタクルスの縫製業産地としての基盤形成が始まったことを裏付けている。しかも、同期の人口増加に認められる顕著な特徴は、農村人口(114.8%)・都市人口(143.6%)ともに著しい増加を示していることである。一般にブラジルでは、1950年代に工業化を実現した都市部へ農村から大量に



第2図 サンタクルスとその周辺地域における人口増加率 (1970年～1991年)
(Censo Demografico do Brasilより作成)

労働力が流出し、農村の疲弊と急速な都市化が同時に進展したが、サンタクルスではこの時期に周辺農村から大量の人口流入が生じて市の全域で人口増加と都市化が進展したとみられる。都市人口比は1960年にはさらに2.1へと上昇した。

1960年の男女年齢別人口構成は、多産多死社会を象徴する左右対称のピラミッド型を示しているが、乳幼児死亡率の高さを示唆するかのようには裾野が狭い特徴がある。とくに20歳未満の若年人口の卓越が認められるものの、男女間には絶対数、年齢別構成両面でほとんど差異はみられない (第3図, 第1表)。

人口増加はその後も続き、1970年には人口が11,685人に増加した。男女年齢別人口構成は相変わらずピラミッド型であるが、1960年に比べ

るとさらに裾野が広がり、死亡率の低下が乳幼児の生存率を上昇させてきたことを示唆している。とくに30歳未満人口の増加が顕著である。男女差はあまり顕著ではないが、女性人口比は1.1と僅かながら上昇し、その影響はとくにスランカ生産の主要な労働力である20～39歳層に現れている (第3図, 第1表)。都市人口比は3.1まで上昇し、都市部への人口移動が続いたことを示している。1960年～1970年期の人口増加率は53.9%で、ブラジル (32.9%) やペルナンブコ州 (26.0%)、レシフェ (34.5%) と比べても依然高い値を示している。しかし、前10年期に比べると人口増加率には大きな低下が認められる。

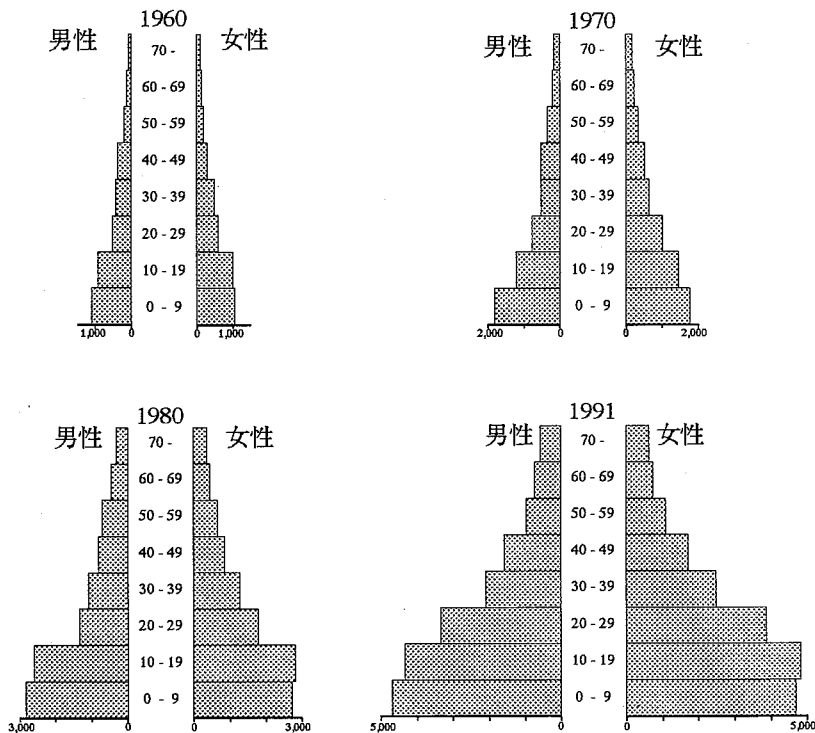
機械化による技術革新や消費市場の拡大により縫製業が著しく発展した1970年代には、人口

動態にも際だった変化が認められる。すなわち、1970年～1980年期の人口増加率は80.7%の高率を示し、レシフェ（13.5%）やペルナンブコ州（19.0%）、ブラジル（27.8%）と比べても、1970年代のサンタクルスの人口増加が異常ともいえる大きさであったことを示している。しかも、この10年期に農村人口は-6.7%の減少を示していることから、1970年代の人口増加はすべて都市部で生じたことがわかる。1970年～1980年期の都市人口増加率は109.1%にも達し、都市人口比も一気に6.9まで急上昇をみせた（第1表）。

人口は10年間で約1万人も増加し、1980年には21,112人となった。男女年齢別人口構成は、1980年も相変わらずピラミッド型を示しているが、1970年に比べると20歳未満人口の急激な増加により裾野が大きく広がっている。とくに顕著な増加をみせた10歳～19歳の女性人口は、年齢階

層内で最大値を示して凸部を形成している（第3図）。これは縫製業関連業種への雇用労働力として、サンタクルスに外部から多数の若い女性たちが流入した結果と考えられる。

サンタクルスとその周辺地域の1970年～1980年期の人口動態をみると、80%以上の人口増加率を示したのはいずれもペルナンブコ州に属するトリタマ（178.2%）、タカインボ（117.1%）、タクアリチングドノルテ（108.6%）、サンタクルス（80.7%）の4市のみで、このうちトリタマとタクアリチングドノルテは、国道104号線でサンタクルスを訪れる際の東の玄関口に位置する。上記4市を除く残りの地域は、そのほとんどが人口増加率25%未満で、とくにサンタクルスを取り囲む北部・西部・南部の隣接地域は顕著な人口減少地域である。このことは、サンタクルスとその東の玄関口に当たる地域に、広大



第3図 サンタクルスの人口ピラミッド（1960年～1991年）
（Censo Demografico do Brasilより作成）

な周辺農村から激しい人口流入があったことを示唆している（第2図-A）。

1991年には人口がさらに増加して38,303人となった。ピラミッド型の男女年齢別人口構成はさらに裾野を大きく広げ、1970年以降に進展した死亡率の低下と乳幼児生存率の上昇効果が顕在化している。また、10歳～19歳年齢層の女性人口の社会増加がより一層進展したことが伺える（第3図）。

1980年～1991年期の人口増加率は81.4%を示し、ブラジル（23.4%）やペルナンブコ州（16.1%）、レシフェ（7.8%）の人口増加率が前10年期中に比べてさらに顕著な減少を示すなかで、サンタクルスでは1970年以降、異常ともいえる高い人口増加率が安定的に維持されていることがわかる。1980年～1991年期には農村人口も22.3%と僅かながら増加をみせたが、都市人口の増加率は90.0%とはるかに大きなもので、都市人口比はさらに上昇して10.7に達した。なお、女性人口比は1970年以降1.1で推移しており男女比には変化がみられない（第1表）。

サンタクルスとその周辺地域で1980年～1991年期に人口増加率が80%以上を示したのはサンタクルス（81.4%）だけであり、残りの地域はほとんどが人口増加率25%未満であった。とりわけ特徴的なのは、前10年期中に著しく高い人口増加率を示したサンタクルス東方に位置するトリタマやタクアリチングドノルテが、同期にはそれぞれ-78.1%、-86.9%と著しい人口減少に転じたことである。その結果、1980年～1991年期に高い人口増加率を達成した自治体はサンタクルスのみとなり、その周囲を人口増加率が低いか、あるいは人口減少に転じた自治体を取り囲むといった同心円構造が生み出された（第2図-B）。

ちなみに、1970年～1991年期の約20年間の人口増加をサンタクルスとその周辺地域で考察すると、人口増加率が50%を越えるのは僅か5市に過ぎず、とりわけサンタクルスの227.8%とカルアルーの103.2%が傑出した高率を示している。

また、人口増加率が高い5市の内、サンタクルスを除く4市はいずれも州を代表する大都市（カルアルーとカンピナグランデ）とその近隣地域（ケイマーダスとペロジャルディン）であり、唯一内陸部の農村地帯に位置しながら他に追従を許さぬ程の高い人口増加率を示すサンタクルスの存在は特異である。しかも、サンタクルスを取り囲む隣接地域のなかでプラスの人口増加率を示すのは北接するバーハドサンミグエル市（9.3%）のみであり、残りの5市はいずれも人口減少地域である。このことが、純農村地帯に忽然と出現するサンタクルスのブームタウン的雰囲気や、周辺農村からの激しい人口流入を強く印象づける要因となっている（第2図-C）。

このように、サンタクルスの人口動態は本地域における縫製業の発達過程と軌を一にしながらか大きく変動してきた。その急激な人口増加ぶりは、縫製業が導入される以前の1940年と1991年のデータを比較することでより鮮明となる。すなわち、1940年～1991年期の約50年間で、サンタクルスの人口は35,924人も増加し、同期の人口増加率は1,510%にも達した。この値は、同期のブラジル（250%）、ペルナンブコ州（165.1%）、そして州都のレシフェ（272.6%）と比べても比較にならない程の高率である。

しかも、このような人口増加がおもに都市人口の増加によることは重要である。すなわち、1940年～1991年期の農村人口の増加は僅か2,137人（人口増加率は187.8%）であるのに対し、都市人口の増加は33,787人で人口増加率は2,722.6%にも達している（第1表）。このことは、サンタクルスの周辺農村から同市の都市部へ人口が激しく流入し続けたことを示唆しており、本地域における縫製業の著しい発展が農村労働力に対する強いプル要因として作用したことを物語っている。

そこで、次の論文では本地域における縫製業の生産流通機構と具体的な経営事例について考察しよう。

（つづく）

注および参考文献

- 1) マラニョン州では1855年に最初の綿紡績工場が操業し、19世紀の末には10社の製糸・織物工場があったという〔ブラジルの農業雑誌 *Agro-nascente*, 1991年 (Vol.55) の記事「ブラジルの綿花」(pp.42~47) による〕。
- 2) このことは、沿岸部のエンジェーニョとは異なり内陸部の牧羊・綿作ファゼンダでは相続により農場が容易に分割され、結果的に小規模農地の集積地としてのアグレステの特徴を顕在化させる重要な要因となった。
- 3) ただし、1980年以降の大規模灌漑農業の進展によりアグロインダストリーを実現した、サンフランシスコ川中流域の一部の内陸農村はその例外であり、以下の文献が参考になる。
 斎藤功・矢ヶ崎典隆・丸山浩明 (1991) : ブラジル北東部サンフランシスコ川中流域における灌漑農業の発展と企業の農場。筑波大学人文地理学研究, 15, 269~300。
 斎藤功・矢ヶ崎典隆 (1991) : ブラジル北東部サンフランシスコ川中流域における農産加工業の進出と農業構造の変化。経済地理学年報, 37, 225~244。
 矢ヶ崎典隆・斎藤功・丸山浩明 (1992) : ブラジル北東部サンフランシスコ川中流域における日系人農業の発展とその影響。横浜国立大学人文紀要第I類, 38, 77~106。
- 4) セルトンやアグレステの伝統的な生業形態に関しては、次のような文献がある。
 丸山浩明 (1998) : ブラジル北東部の熱帯乾燥・半乾燥地域における小農複合経営。金沢大学教育学部紀要, 47, 119~140。
 丸山浩明 (1998) : ブラジル北東部パライバ州スメ湖周辺の灌漑農業と漁業。金沢大学教育学部紀要, 47, 97~118。
 Saito, I. and Maruyama, H. (1988) : Some types of livestock ranching in São João do Cariri on the Upper Paraíba Valley, Northeast Brazil. *Latin American Studies*, 10, 101-120。
 Saito, I., Maruyama, H. and Muller, K. (1988) : A comparative study of land use between Campo Alegre in the Sertão and Sítio Açude de Pedra in the Agreste, Paraíba, North-east Brazil. *Latin American Studies*, 10, 77-99。
 Hiraoka, M. (1986) : Agricultural changes in Northeast Brazil: The Sítios of the Agreste in Paraíba. *Latin American Studies*, 8, 63-89。
- 5) SEBRAE/PE (1992) : *Diagnostico do setor de confecções*. SEBRAE/PE, 18p+67 anexos。
 セブラエ (SEBRAE) は中小企業の支援と振興を目的に設立された機関で各州に設置されている。技術支援や融資の際の信用供与、マーケティングなど、中小企業の経営に関する幅広い支援事業を行っている。
- 6) 三田千代子 (1996) : ブラジルヒンターランドのブーム・タウンー家内縫製業の発展。ラテンアメリカ・レポート, 13-4, 64~70。
- 7) Martins, Magno (1993) : *O Nordeste que deu certo*. Banorte, 289p。
- 8) 前掲7) の文献によると、アタッカディスタの数は大規模なものは20店、小規模なものは50店にも達するという。
- 9) Aquino, Wilson Rodrigues de (1980) : *O ramo de confecções de Santa Cruz do Capibaribe*. Universidade Federal de Pernambuco (修士論文)
 Costa, Campello Glauce Maria da (1983) : *A atividade de confecções e a produção do espaço em Santa Cruz do Capibaribe-PE*. Universidade Federal de Pernambuco (修士論文), 157p。
- 10) FIAM (1996) : *Perfil municipal - Santa Cruz do Capibaribe*. FIAM, 759~762。
- 11) FIDEPE (1982) : *Santa Cruz do Capibaribe*. FEDEPE, 56p。
- 12) ただし、前掲9) のアキノのように、3商人が活躍する以前から既にサンタクルスには端切れを売却する者がいたことを指摘する研究者もいる。彼はこれら3商人の功績が、縫製業の草分けとしての役割ではなく、彼らが端切れを大量に町に提供したことで、既存の仕立屋たちが生産量を増大させ、縫製業が本地域で一般的かつ重要な経済活動に成長したことにあるとみる。
- 13) その後、レシフェの繊維会社はかつて無償で提供していた端切れからもお金を徴収するようになったという。
- 14) Avanísia, S., Israel, C. and Lúcia, O. (1996) :

Sulanca. ART'BERG, 71p.

- 15) 前掲11)
- 16) 前掲14)
- 17) 最新式の電動ミシンは、足踏み式ミシンの実に約100倍の生産性を実現したという。
- 18) 前掲5)によると、全1,500事業所の機械保有状況は、1,091事業所(72.73%)が1台~3台、284事業所(18.93%)が4台~6台で、両者で全体の9割を越えている。
- 19) 前掲14)
- 20) 前掲5)によると、全1,500事業所の内、原反を利用しているのは83.0%に当たる1,245事業所に達する。
- 21) SEBRAE/PE(1994) : *Cadastro Industrial do Pernambuco*. 932p.
この資料は、納税や融資によってSEBRAEが把握している事業所、すなわち比較的規模が大きい事業所に記載が限定される。そのため、インフォーマルセクターに属する大半の零細な製造業者は記載されていない。
- 22) ちなみに、1970年以前の開設事業所は53(3.53%)、1970年~1980年は108(7.2%)、そして1990年以降は548(36.53%)である。
- 23) 前掲5)
- 24) Governo do Estado de Pernambuco (1995) : *Workshop - A crise do pólo da sulanca no estado de PE -*. Governo do Estado de Pernam-

buco, 9p+19 anexos.

- 25) 零細な製造業者が大きな痛手を受けて倒産・廃業するなかで、セブラエの工業年鑑は1985年に33、1988年に64、1992年に92、1993年に86、1997年に80事業所と、大規模な事業所が80年代から1992年まで急増し、その後は若干の減少が認められるものの安定していることを示している。
- 26) ファッションショーの開催期間は5日間で、出店数は300~500店舗である。このうち約8割はノルデステ諸州からの出店で、残りは南東部諸州からのものである。
- 27) アタッカディスタに代表される縫製業関連の商人たちは、既に十分な資金力を備えており、現在は銀行からの資金の借り手ではなく、大口預金者として重要な顧客に転じている。
- 28) 融資額にかかる1カ月当たりの利子は、TR (Taxa referencial) + 1%と設定されており、調査時には月利1.5%であった。また資金の返済は12~36カ月の分割払いで行われている。
- 29) この融資事業の利子の算定方法は、TJLP (Taxa de Juros de Longo Prazo, 長期金利) + 5.33%と設定されており、TJLPはインフレ率を考慮して3カ月ごとに決定されることになっている。TJLPはリアルプラン以降下がり続けている。調査時には10.15%であった。これは年利が15.48%となることを示している。なお、資金の返済は最大36カ月の分割払いである。